

<研究ノート>

構造化理論再考

——モダニティ論との連続性／断絶——

名 部 圭 一

キーワード：ギデنز，構造化理論，ハイモダニティ，再帰性，二元論

1. はじめに

1970年代中頃からおよそ10年を費やし構築されたアンソニー・ギデنزによるオリジナルな社会理論，構造化理論（Giddens 1976, 1979, 1984）について，1990年代に展開されたモダニティ論（Giddens 1990, 1991, 1992）の観点から検討を試みる。具体的には，近代社会を理解するための理論的装置として編み出された構造化理論が，はたしてモダニティ論のなかで十分に生かされているか，モダニティ論のなかで述べられた近代社会の特徴は，構造化理論が提起した社会のイメージと矛盾なくつながっているか，こういった問いについて考えてみたい¹⁾。

1) 筒井淳也（2006）は構造化理論とモダニティ論の連続性をはっきりと否定しているが，しかしその主張はたぶん印象論にとどまっている。本稿では，ギデنزの前期著作と後期著作を突き合わせることで，両論の連続性と断絶がどのような点にあるのかを明らかにする。

2. 構造化理論——実践的意識と構造の二重性

構造化理論が目指した目標を一言でいえば、方法論的個人主義と方法論的集合主義、個人と社会、行為と構造といった形で語られてきた「社会学的方法論をめぐる百年戦争」に終止符を打つこと、あるいは、行為と構造の関係を、両者を対立させたりどちらか一方を過度に強調したりせずに、理解可能なものとする社会理論を作り上げることである。

デュルケムの観点によれば、構造（＝社会の規則）とは行為者に外在し拘束する「社会的事実」である。しかし、このような見解をとると、構造がどのようにして産出されているのかを問うこと、あるいはそれが変化していく過程を描くことが著しく困難になる。実際、この見解を受け継いだ機能主義や構造主義の社会理論においては、行為者は社会の価値やイデオロギーに突き動かされる「文化中毒者」として描かれ、これらの出現や変容が主題化されることはない。

上記の難点を克服すべくギデンズは構造観の刷新を図る。その際、ギデンズが構造のイメージとして念頭に置いているのは、言語の構造、すなわち文法である。言語の使用とその規則に関する知識のあいだには、しばしばある奇妙なねじれが存在している。たとえば英語を母語とする者にとっては、その言語規則を明瞭に知っていなくともほぼ文法にかなったかたちで英語を使用することができる。他方、外国語として英語を学んだ者のなかには、文法上の細々とした規則については明示的に述べることができ、またそういった規則をはっきりと意識しているが、にもかかわらず、実際にその言語を使用するとなると困惑し適切に言葉を操れないという人が多く見られる。

このことからわかるのは、言語およびその規則を「知っている」ということには、性質の異なるふたつの水準があるということである。ひとつは、言語規則を明示的に語ることができるという意味での知識の水準があり、もうひとつは、言語を規則に従ってかたちで現実に使うことができるという意味

での知識の水準がある。ギデンズは前者のような規則内容を対象化しながら言葉によって知っている (knowing that) という知識のあり方を言説的意識 (discursive consciousness)、後者のような実践と一体となってそのやり方を知っている (knowing how) という知識のあり方を実践的意識 (practical consciousness) と呼び (Giddens 1979, 1981, 1984)、言語活動を含むあらゆる社会的行為にとってより重要な知識の形態は後者のほうであるとした²⁾。

実践的意識の水準で構造と行為の関係を考えなおすならば、両者はもはや対立するものとも、また構造が一方的に行為を規定するものとも捉えることはできなくなる。構造は行為者を拘束し行為のしかたを決定するだけではない。逆に構造は、実践的意識という知識能力 (knowledgeability) を有した、その意味で「有能な」行為者によって産出されてもいるのだ。このことから、あの有名な「構造は行為の媒介であると同時に結果でもある」という構造の二重性 (duality of structure) のテーゼが表明されることになる。

このように、ギデンズによると、行為と構造のあいだには、行為が構造を生み出しこの生み出された構造が行為を規定するという、一種の回帰的なループが形成されているものと捉えることができる。したがって、構造は行為と切り離しては理解しえず、また行為のしかたいかんによって構造はつねに変動の可能性にさらされているともいえるだろう。ちょうど、言語の規則がわれわれの実践的な発話のしかたいかんによってしだいに変化していくように。構造なるものが実体としてあるのではない、知識能力を有した行為者によって産出される構造化 (strucutration) という過程があるだけだ——これこそが、構造化理論によって提起された社会のイメージである。

2) ギデンズのこうした規則観は後期ウイットゲンシュタインのルール・フォローイングをめぐる考察から大きな影響を受けている (Wittgenstein 1953)。

3. モダニティ論——再帰性の徹底化³⁾

ギデンズのリフレキティビティ論におけるキーワードをひとつ挙げるとすれば、それは再帰性 (reflexivity) ということになるであろう。ギデンズ自身、構造化理論のなかですでに再帰的もしくは再帰性という言葉を用いてきた。この言葉は、ひとつは行為者の自らの行為にたいする反省的な意識について論じた文脈で用いられており、そこでは「行為の再帰的モニタリング」という表現が使われている。ギデンズによれば、この再帰的モニタリングは人間が行為主体 (agent) であるための不可欠な条件であり、したがっていかなる社会にも普遍的に見いだせる特性である。

再帰性という言葉が使われたもうひとつの文脈は、自然科学と対比された意味での社会科学の特質について論じられたくだりである。物理学や化学といった自然科学で研究対象となるのは、知識をもたずまた思考することもない「モノの世界」であるが、社会科学の研究対象である「社会」は、実践的であれ言説的であれ莫大な知識を有した行為者がそうした知識に基づいて思考しながら生きる世界である。このことは自然科学と社会科学に根本的な相違をもたらす。つまり、自然科学において提起された理論や学説はその研究対象に影響を与えることはないが、社会科学の活動というのは、行為者が日々行っている解釈をさらに解釈するという「二重の解釈学」であるため、そこで発表された理論や統計資料は研究対象にたいして影響を与え、結果としてこの対象の性質そのものを変化させてしまうということがありうるのである。このように社会科学に特徴的に見られる、ある対象に関する知識や言説がその対象へとフィードバックしその特質に影響を与えること、これこそがギデンズが再帰性という言葉を用いる際のもうひとつの意味である。

モダニティ論においては、最初の再帰性概念を前提としつつも、ふたつ目のほうに焦点が当てられている。ギデンズは、社会科学の特徴である研究と

3) 本節は名部 (2005) に依拠しながら、適宜内容・表現を改めた。

その対象のあいだの循環的な関係は、今日の社会ではそれ以外の領域においても見いだせるきわめて一般的な現象であるという。たとえば、平均初婚年齢や合計特殊出生率といった統計的なデータの公表が、行為者の知識や意識に多かれ少なかれ影響を与え、そのことによって結婚や出産といった個人のパーソナルな側面が変化を被るなどということは、すぐれて現代的な制度的再帰性の一例である。このように、ギデンズは近代社会の特徴を何よりも、「社会的実践が、まさにこの実践にかかわる新しい情報の観点からつねに吟味・改変され、結果、その性質を構造的に変化させていくという事実」(Giddens 1990: 38 = 訳 55)に見いだしている。

さらに、再帰的なかたちで還流する情報は行為者の実践を対象とするだけではない。情報は情報それ自体を対象にすることも可能なのであるから、それまで支配的であった知識が否定的に言及されることで、その「権威」を失いあまたある情報のなかのひとつへと格下げされることも、再帰性の力がより徹底化されたハイモダニティではしばしば生じる。この意味で、再帰性を支える精神とはいわば「徹底的な懐疑原理」であるといえる。権威を付与されたあらゆる支配的な知を相対化し、それらは単なる仮説以上のものでないと見なすこと、これこそが制度的再帰性の根底に見いだせる態度なのである(Giddens 1991; 名部 1994)。

したがって、今日われわれが生きるハイモダニティは、伝統や慣習の価値が廃れ、代わりに科学に代表される合理的な知が幅を利かす時代なのではない。このような合理的な知それ自体も再帰性の影響を免れえないのだから、ハイモダニティの社会とは、正当性の基盤がたえず侵食され、だれひとり最終的な解答を与えることも手に入れることもできないという、不確実性によって全体が覆われた社会である。

ギデンズはこのような状況をかならずしもペシミスティックに捉えているわけではない。それどころか、社会生活に関する知の増大は、一般の人々が自分たちの生活を反省的に吟味し新しいかたちで自らの生を切り開いていく

際の肯定的な契機にもなりうる、というのがギデンズの取る基本的なスタンスである。この見地からすると、しばしば指摘されるセラピーや自助マニュアルといった広い意味での心理学的知の隆盛は（森 2000）、「システムによる生活世界の植民地化」（ハーバーマス）の傾向の強まりを示すものというより、人々がこれまで自明視していた社会生活や人間関係を再検討し、それによって新たな知識と力を獲得する一種のエンパワーメントの表れとして、積極的な評価が下されることになる（Giddens 1991, 1992）。

ハイモダニティの社会は、たしかに近代の黎明期に啓蒙主義者が思い描いたような社会ではけっしてない。合理的な知によって社会全体が見通せたり、ましてやコントロールしたりするなどということは、およそありえない事態になってきているのだから。しかし、このことは、そこに生きる人々が社会から疎外されたり、いっそう無力な存在となっていったりすることを必ずしも意味しない。人々は絶対的な知や確実性がないという状況のなかで、積極的に知を摂取し社会とかかわりあいながら「再帰的プロジェクト」として生きており、またそうしなければならない。これがギデンズのモダニティ論から引き出せる時代診断とその規範的含意である。

4. 構造化理論 vs.モダニティ論

これまで論じてきたように、構造化理論において構造概念に新しい定義を与え、さらには知識能力を有した行為主体という能動的な行為者像を打ち立てたギデンズは、モダニティ論の文脈においても、科学やマスメディアが与える知識や情報を摂取し、それらを参照しながら行為選択を企てる再帰的プロジェクトというやはり能動的な自己イメージを提起した。この点において、ギデンズ社会学の原論である構造化理論とその各論としてのモダニティ論は、無理なくつながっているように見える。しかし、本当にそうだとはいえるだろうか？これより掘り下げて考えてみたい。

4-1. 構造化理論から見たモダニティ論

まず確認しておきたいのは、構造化理論において「有能な行為者」といわれるときの「有能性」とは、行為者がとりわけ実践的意識のレベルにおいて社会的規則を「知っている」という事実を指していたということである。行為者はふつう、「状況Aにおいてふさわしい行為とはこれこれである」といったように言葉で定式化されたかたちで規則を把握しているわけではない。それにもかかわらず、行為者には十分な知識能力があるといえるのは、彼らが自身の振る舞いによって規則に従った行為を示すことができるからであり、この実践的な知識形態を重視する点こそが、構造化理論と機能主義や構造主義などの決定論的な社会理論を分かち最大のメルクマールとなっていた。

では、モダニティ論で展開された再帰性のアイデアを見るとどうだろう。一方で、近代とりわけハイモダニティの社会では数々の知識や情報が広範に撒き散らされ、行為者は新聞や書物を通じてそれらと積極的にかかわっている点が強調されはするが、しかし、このようにして得た知識や情報がどのようにして実践的意識に翻訳されているか、というその過程が分析の俎上にもせられることはほとんどない。ギデンズ自身が挙げている結婚や離婚、犯罪とその検挙などに関する公式統計の公表は、たしかに行為者に新たな知識を与え、彼らが行動する際の貴重な資料となるかもしれない。しかしながら、このような知識はまずは言說的意識の水準で理解されるのが普通であり、そこからダイレクトに人々の実践と結びつくという保証は何もない。

このような反論にたいして、ギデンズは次のように主張するかもしれない。すなわち、言說的意識と実践的意識のあいだには大きな垣根はなく、前者で理解された情報は後者へと容易に翻訳されるのである、と。しかし、かりにこの主張を認めるとすると、ハイモダニティに生きる行為者はマスメディアによって与えられる情報によって簡単に左右される「判断喪失者」ということになり、そうなると「文化中毒者」や「イデオロギー中毒者」といっ

た構造化理論が批判し対抗しようとしていた行為者像となんら選ぶところがなくなってしまう。これは構造化理論の破綻を意味するだろう。したがって、もしギデンズが、構造化理論が提起した本来の意味での「有能な行為者」というイメージをモダニティ論においても維持し活用したいのなら、言説的意識と実践的意識の相違にもっと敏感になった上で、前者で把握された情報や知識が後者の水準ではどのように処理されているのかを示す必要がある。

4-2. モダニティ論から見た構造化理論

先ほどは構造化理論の見地からモダニティ論について考えてみたが、今度は逆にモダニティ論で展開されたアイデアから構造化理論を検討してみよう。モダニティ論のキーコンセプトである制度的再帰性の根底には、「徹底的な懐疑原理」を見いだすことができるという点についてはすでに述べた。伝統や慣習といったかつて人々の行為を方向づけていた規範にたいして疑いの目が向けられたことにより、これらは脱中心化され規範としての力を相対的に低下させることになったのである。このことを行為者の側からいえば、近代社会にあっては、伝統や慣習などの規範はもはや彼らにとって行為を可能にするものとして立ち現れず、むしろそれを拘束するものとして現象するということだ。このように制度的再帰性は行為を可能にする条件をひとつの限界として指し示すことにより、その權威の基盤を侵食していく。このことはギデンズの構造概念に何をもたらすであろうか？

構造化理論で精緻化された構造概念には、行為の媒介であると同時に結果であり、また行為を可能にするものであると同時に拘束するものであるという二重の意味合いがあった。しかしここで気をつけないといけないのは、構造を二重の存在として考えることができるのは、行為者が社会的規則を自明視している場合に限られるということである。人は母語を話すとき通常その言語の規則をもっぱら拘束的なものと捉えてはいない。ここでは、言語規則

(ラング)と個々の発話(パロール)は、発話を行うたびに規則が生み出されその規則がさらに発話を規定するという具合に、渾然一体となったかたちで意識されているはずだ。このことが可能なのは、発話者が言語規則を実践的意識の水準で十分に理解しており、したがって規則を当然視し、いわば「自然」なものとして受け止めているからである。しかし、もしこの言語規則に懐疑の目を向けたとしたらどうだろう？英語を使用している人間が「複数形の名詞を作るにはなぜ末尾にsを付けないといけないのか」という疑問を呈したとしたら。そうすると、「名詞を複数形にするには末尾にsを付けるべし」という規則は、発話を可能にするものというよりそれに限定を加える拘束的なものとして発話者の前に立ちはだかることになるであろう。

だとすれば、行為を可能にする規範を疑いそれを相対化するという効果をもつ近代の制度的再帰性の概念は、構造化理論の中核となるアイデアである構造の二重性テーゼを切り崩す可能性をはらんだものであるといわねばならない。この点についてはニコス・ムーゼリスが的確な指摘を行っている。

行為者が、自らが使用する規則に関して再帰的=反省的(reflexive)になるとき——つまり、規則を分析し、批判し、変化させようと規則から距離をおくとき——、われわれは主体-客体の二重性から主体-客体の二元論へと移動している。(……)こう考えると、ギデンズの再帰性には(個人的再帰性も制度的再帰性もともに)、間違いなく主体-客体の二元論がともなわれている。

(Mouzelis 1999 : 94)

このようにモダニティ論の観点から構造化理論を振り返ってみると、構造化理論における行為や構造といった概念は、意識的・反省的な行為ではなく、ルーティーン化された慣習行動に依拠しながら組み立てられたものであることがわかる。それゆえ、構造化理論が描くイメージはシュツ的な「自

然的態度のエポケー」によって覆われた社会へと傾斜していくことになる。このことは社会理論一般というレベルで見たときには、かならずしも致命的な欠陥であるとはいえないだろう。しかし、構造化理論が近代社会を理解するための理論装置であるとするなら、構造の二重性というアイデアは行為と構造が対立する可能性——これは制度的再帰性が徹底化するハイモダニティにおいてこそ高まる——を主題化しえないという意味で、決定的な限界を有しているといわなければならない。

5. おわりに

以上、構造化理論から見たモダニティ論、モダニティ論から見た構造化理論というふたつの観点から、両論のあいだに連続性があるのかどうかについて考察してきた。その結果、(1) 構造化理論で重要視されている実践的意識という概念がモダニティ論ではほとんど生かされていない、(2) モダニティ論で主張される「現代は再帰性が徹底化されたハイモダニティの時代である」との時代診断は、行為と構造の循環的相互規定を示す「構造の二重性」というより、行為と構造の対立的な二元論を要請する、という点で両論のリンクは成功しておらず、したがってそこには断絶が見いだせるとの結論を得るに至った。

このような「失敗」を招いた最大の要因は、モダニティ論において導入された再帰性の概念が、「個人と社会」あるいは「行為と構造」という古くからある対立図式を再び召喚してしまうことに、ギデンズ自身あまりにも無頓着であるという点にある。

現代は社会の再帰性が高まっているのだから、個人もそれに応じて再帰的プロジェクトとして生きよ。そうすればハイモダニティにうまく適応できるであろう。ギデンズはこのように呼びかける (Giddens 1990, 1991, 1992, 1999; Giddens and Pierson 1998)。しかしながら、個人レベルの再帰性=反省性が高まると、行為者は構造(規則)を自らの行為を規制する「拘束」と

して捉えるようになるため、社会への「適応」という点においてはそのことがネガティブに作用する可能性が高まるはずだが、残念ながらギデنزはそのことをあまり強調しない⁴⁾。

「ハイモダニティたる現代は再帰性が高まった時代である」との時代診断は、おそらく適切であり正しい。しかし、もしそうであるなら個人と社会、行為と構造の対立を安易に「循環の構図」に解消してしまうのではなく、むしろ両者の分離・対立にもっと敏感にならなければならない。もちろんそれは19世紀末から20世紀初頭にかけての認識論へと単に回帰する、ということではない。いま求められているのは、ハイモダニティという状況下で顕在化した個人と社会、行為と構造の分離・対立という二元論を踏まえて社会理論を構築しなおすことである⁵⁾。

文献

- Giddens, A. 1976(→1993) *New Rules of Sociological Method: A Positive Critique of Interpretative Sociologies*, 2nd ed., Polity. (松尾精文・藤井達也・小幡正敏訳『社会学の新しい方法規準 [第二版]』而立書房 2000)
- Giddens, A. 1979 *Central Problems in Social Theory: Action, Structure and Contradiction in Social Analysis*, Macmillan. (友枝敏雄・今田高俊・森重雄訳『社会理論の最前線』ハーベスト社 1989)
- Giddens, A. 1981(→1995) *A Contemporary Critique of Historical Materialism*, 2nd ed., Macmillan.
- Giddens, A. 1984 *The Constitution of Society: Outline of the Theory of Structuration*, Polity. (門田健一訳『社会の構成』勁草書房 2015)
- Giddens, A. 1990 *The Consequences of Modernity*, Polity. (松尾精文・小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か?』而立書房 1993)
- Giddens, A. 1991 *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern*

4) 近年の日本の文脈でいえば、標準的なライフコースへの懐疑という再帰性の高まりは、人間関係を剥奪し「無縁社会」をもたらしたとの指摘もある(石田 2011)。

5) 三上剛史(2010, 2013)はこのような認識に基づいた理論構築の試みである。

- Ages, Polity. (秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ』ハーベスト社 2005)
- Giddens, A. 1992 *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*, Polity. (松尾精文・松川昭子訳『親密性の変容』而立書房 1995)
- Giddens, A. 1999 *Runaway World*, Profile Books. (佐和隆光訳『暴走する世界』ダイヤモンド社 2001)
- Giddens, A. and Pierson, C. 1998 *Conversation with Anthony Giddens: Making Sense of Modernity*, Polity. (松尾精文訳『ギデンズとの対話』而立書房 2001)
- 石田光規 2011『孤立の社会学』勁草書房。
- 森 真一 2000『自己コントロールの檻』講談社。
- Mouzelis, N.P. 1999 Exploring post-traditional order: individual reflexivity, 'pure relations' and duality of structure, in O'Brien, Penna and Hay (1999).
- 三上剛史 2010『社会の思考』学文社。
- 三上剛史 2013『社会学的ディアボリズム』学文社。
- 名部圭一 1994「アンソニー・ギデンズの近代社会論」『ソシオロジ』38(3): 83-100。
- 名部圭一 2005「モダニティと再帰性(ギデンズ)」大村英昭・宮原浩二郎・名部圭一(編)『社会文化理論ガイドブック』ナカニシヤ出版。
- O'Brien, M., Penna, S. and Hay, C. (eds) 1999 *Theorising Modernity: Reflexivity, Environment and Identity in Giddens' Social Theory*, Longman.
- 筒井淳也 2006『制度と再帰性の社会学』ハーベスト社。
- Wittgenstein, L. 1953 *Philosophical Investigation*, Basil Blackwell. (藤本隆志訳『ウィットゲンシュタイン全集 8 哲学探究』大修館書店 1976)